

## 原 著

# ペスタロッチーの貧児・孤児教育をめぐって（1）

Um Pestalozzis Erziehungsexperiment für armute Kinder und Waisen（1）

光田 尚美

**要約：**本研究の目的は、ペスタロッチーがなぜ貧児や孤児の教育にこだわったのか、その根底にある彼の思想の形成に迫り、後の教育実践とのつながりを探ることによって、彼が教育論として結実させたものの意義を再評価するとともに、その方法を今日的課題に照らして再構成し、その汎用性を探ることである。本稿は、その（1）としてペスタロッチーの思想形成の特徴を、18世紀初頭のスイスにおける私立孤児院創設に影響を与えた敬虔主義との対比に焦点を当て、整理する。

**Key Words：**ペスタロッチー、敬虔主義、啓蒙主義、道徳、宗教

### はじめに

ペスタロッチー（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746 - 1827）がなぜ貧児（arumute Kinder）や孤児（Waisen）の教育にこだわったのか、その根底には、時代の精神のなかで培われた、彼独自の思想がある。一般に思想形成には、その生い立ちや交友関係、試みられた事業の成果など、それぞれの人生の歩みが大きく関わっているが、ペスタロッチーにおいては、その歩みが18世紀のスイスを中心に展開されたことを忘れてはならない。とりわけチューリヒは、彼が生を受け、多感な時期を過ごした地である。その地に息づいていた独特の改革精神は、若きペスタロッチーにとって大いなる刺激となったであろう。

チューリヒの精神的風土がペスタロッチーに与えた影響については、多くの先行研究が指摘するところである。例えばヒュルリーマン（S.M.Hürliemann）によれば、ペスタロッチーの青年期は、18世紀スイスに到来した啓蒙（Aufklärung）の運動にどっぷりと浸っていた<sup>(1)</sup>。「愛国者団（Patriotenbund）」<sup>(2)</sup>における活動、ボドマー（Johann Jakob Bodmer）<sup>(3)</sup>やブライティンガー（Johann Jakob Breitinger）<sup>(4)</sup>の指導、とりわけルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『エミール（Emile, ou de l'éducation, 1762）』の刺激は、ペスタロッチーを激しく揺り動かし、その改革精神の源を築いたといえる。

しかしそれは、あくまでもチューリヒ的なやり方にもとづいての啓蒙であったことに注意しなければならない<sup>(5)</sup>。その特徴は、ツヴィングリに端を発するチューリヒの宗教改革の伝統において、新たなプロテストを生じさせたことに求められる。ここでいう新たなプロテストとは、いわゆる敬虔主義（Pietismus）の運動<sup>(6)</sup>である。すでに明らかになっているように、若きペスタロッチーはこの敬虔主義の運動にも接触していた<sup>(7)</sup>。森川はこの点を捉えて、「彼は啓蒙主義を自己の思想のなかに受け容れ、しばしばその言葉で語っているが、宗教改革のメッセージを決して放棄しなかった」<sup>(8)</sup>と特徴づけている。まさにペスタロッチーの思想の淵源では、18世紀スイスにおいて展開された二つの世界が、チューリヒがそうであったように融合されてあったのだ。

本研究は、これら先行研究が提出する数々の証拠に異議を唱え、ペスタロッチー理解を覆そうとするものではない。そこに導かれたことがらが、ペスタロッチーの教育実践、とりわけ貧児や孤児を集めての教育実験にどうつながっているのか、その連関を探ることによって、ペスタロッチーが教育論として結実させたものの意義を再評価したいと考える。例えばクレスポ（M.Crespo）は、スイスにける施設教育（Heimerziehung）の歴史のなかで、ペスタロッチーが今なおその改革者として注目されているとともに、19世紀に生じた施設教育の新しい教育学的構想の基盤となったと評価されていることに注目している<sup>(9)</sup>。このような評価がなされるにいたったのは、ペスタロッチーの試みのうちに、時代の要請に応え

2011年12月2日受付／2012年1月18日受理  
Naomi MITSUDA  
関西福祉大学 社会福祉学部

るものと、ある一定の枠組みでは捉えきれない彼の独特の立場とが混在しており、まさにその特異性が、彼の実践に他にはない固有性と、時代の制約を超えた普遍的な実効性としてあらわれたからではないだろうか。その独特のありように、私たちの学ぶべき原理があると考えられる。

そこで本研究では、ペスタロッチーの思想形成の特徴を、貧児や孤児の教育への関心やその教育の改革構想とのつながりを視野に入れて明らかにし、彼が教育論として結実させたものの意義を再評価するとともに、今日的課題に照らして彼の方法を再構成し、その汎用性を探りたいと考える。考察は以下の手順で進める。

まず、ペスタロッチーの思想形成の特徴を、ソエタール (M. Soëtard) の論を手がかりに整理していく。ハレの研究書に掲載された論考の冒頭にて、ソエタールは、「子ども、敬虔主義、啓蒙主義の関係と、その問題提起とを具体的に示す教育学的イメージが仮に存在しているとするならば、ペスタロッチーの名前、彼の志操、彼の活動が指し示されるだろう」<sup>(10)</sup> と述べている。このことは、ペスタロッチーとフランケ (August Hermann Francke)<sup>(11)</sup> の思想的な対比とともに、ペスタロッチーの貧児・孤児教育と、敬虔主義の影響を受けて展開された18世紀初頭の私立孤児院の実践とを対比させる視点を提供するものにもなるのではないかと考える。

次に、こうした特徴をもつペスタロッチーの思想が、貧児や孤児のための教育において、いかなる方法を導いていったのか、シュタンツの教育実験を中心に考察する。このことはつまり、敬虔主義と啓蒙主義という二つの思想潮流が、彼の教育論においてどのように架橋され、新たなものを生み出したのかを示すものである。そしてまた、そうすることによって私たちは、時代の精神を受け容れつつも、教育実験の省察を通して主体的に読み解き、自らの思想として再構築していくという、ペスタロッチーの思想形成の内実を明らかにすることができると思われる。

そして最後に、「メトード (Methode)」として結実したペスタロッチーの方法を、今日的課題へと照射することを試みたい。その一つの方略として、癒しにつながるケアの課題と、人間の成長や発達につながる養育・教育の課題とを混在させている施設養護の人間形成論として捉え直すことができればと考えている。

以上の研究の端緒として、本稿では、ソエタールのパースペクティブに依拠しながら、貧児・孤児教育の実践を支えるペスタロッチーの思想界を整理していく。

## I. 『リーンハルトとゲルトルート』の挿話に見る二つの潮流

チューリヒにおける敬虔主義と啓蒙主義の対立と、それがペスタロッチーの思想の基盤を形成したことについては、すでに多くの先行研究が明らかにしているとおりで、しかし実際に、この相対する要素を含み込んだ二つの世界を、ペスタロッチーはどのように絡み合わせ、内面化していったのであろう。このことを探る一つの資料として、ソエタールは、『リーンハルトとゲルトルート (Lienhard und Gertrud, im vierten Teil, 1787)』におけるヤコブとクリストフ兄弟の挿話<sup>(12)</sup>を取り上げている。

### 1. 「知力のベスト」なのか、あるいは「心情のベスト」なのか

この挿話は、二人の兄弟が領主に対して、かつて傾倒していた宗教団体から離脱したことを改めて報告するという内容であるが、「頭と心は、もし人間が両者を鎖でつないでいないならば、同じように人間をもてあそぶだろう (Der Kopf und das Herz hat mit dem Menschen gleich sein Spiel, wenn man nicht beiden wohl auf den Eisen ist)」という深遠なタイトルが付されている。その真意は、宗教団体からの離脱をめぐるクリストフの葛藤を辿っていくことで理解することができるだろう。

「なにゆえに教団を去ったのか」という領主の問いかけに、クリストフは次のように答えている。

「それはもはや、別の教団に属したりしたいためです。私たちはすべての人々に対して平等でありたいのであって、一部の人々をひどく愛するのに他の人々をひどく冷淡に迎えるようではありたくないのです」<sup>(13)</sup>。

このように考える根拠を、クリストフは教団の仲間たちと教団を批判する者たちとの対比として示している。

「人 (教団を批判する者たち) は彼ら (教団の仲間たち) に向かって、お前たちは愚かで単純だということです。 (中略) 彼らは理性や分別といったことがらを、何を成し遂げたかということに基づいて測ります。彼らの言葉を借りれば、何かを成し遂げればこれは祝福で、成し遂げなければ天罰です。ゆえに祝福が彼らのもとにある限り、彼らは誰に愚か者といわれようと、決して信じないのです」<sup>(14)</sup>。

クリストフによれば、教団の仲間たちは自らの理解の範囲を制限し、自らの望むところから先へ進ませようとしない。そしてこのように、神との絆や神の祝福

にあらゆるものを絡め取ってしまうような教団のあり方は「心情のベスト (Hezenspest)」に罹っていると形容される。対して、教団を批判する者たちについては、彼ら(教団の仲間たち)の善行を「全く理解せずに」不当に非難し、それにもかかわらず、その行為を改めるための実例を彼らに示すこともないとして断じられている。知力を自己満足で終えてしまう彼らは、いわゆる「知力のベスト (Verstandespest)」に罹っているのだ。

クリストフが教団を去ったのは、このいずれにも惑わされずにありたかったからである。そしてペスタロッチーはクリストフの言葉を借りて、次のように明言する。

「このようにして、知力がすべてだ、あるいはすべてを心情のうえに築けばよいなどと考えるようになったとしたら、(中略)人はおろそかにされた片方をおのずから死滅させてしまいます」<sup>(15)</sup>。

ソエタールは、この「知力のベスト」、「心情のベスト」の語<sup>(16)</sup>に注目する。挿話において、前者は「理性」や「理解」への熱狂として、後者は「敬虔」の名のもとに築き上げられたセクト的な盲信として特徴づけられている。このことから彼は、時代の分与する二つの精神世界が当時の人々の心性や思考様式に及ぼした影響、さらに言えば、啓蒙主義への熱狂、あるいは敬虔主義への傾倒の結果として生じる問題に対するペスタロッチーの構え、ここに見出すことができるというのである。それは、「知力のベスト」か、あるいは「心情のベスト」か、という葛藤状態に置かれた二人の兄弟の選択が、いずれにも属さず、かついずれでもあるという構えであったことに、極めて象徴的にあらわれている。

## 2. 初期ペスタロッチーの思想的実験

ところでペスタロッチーは、この二つの人間諸力の天秤をいかにして釣り合わせようとしたのか。ソエタールによれば、ペスタロッチーのテキストのうち、「知力 (Verstand)」に関するものには、ノイホーフにおける功利主義的な考え方や、「スイス週報 (Schweizerblatt)」における現実的な社会の考察、『リーन्हルトとゲルトルート』における少尉の学校や専制政治などがある。そして「心情 (Herzen)」を強調したものには、『隠者の夕暮 (Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1790)』の描写、その他のテキストにおける数々の心情の吐露や夢想、「家庭教育 (Hauserziehung)」への言及などがある<sup>(17)</sup>。

しかしペスタロッチーにおいては、この二つの傾向が同一のテキストのうちで等しく強調されることもある。

例えば、児童労働の生産性が強調されたノイホーフ論文では、その冷静な見積りの方で、貧しい子どもたちの仕事部屋に讚美歌が流れるよう求められている<sup>(18)</sup>。また、『リーन्हルトとゲルトルート』においても、ゲルトルートの心のモデルは、教師である少尉の悟性と対照をなすよう描き出されている。

## II. ニコロヴィウス宛書簡における信仰告白とキリスト教理解

ソエタールによれば、こうした対比は、1792年10月1日付のニコロヴィウス宛書簡<sup>(19)</sup>において最も先鋭化されているという。ペスタロッチーはそのなかで、自らの生活の混乱によって、「私を宗教にいざなう感情」と「宗教から外れさせようとする判断」、すなわち「心情」と「知力」との間の彷徨を経験したと述べている。この時期、理想に燃えたノイホーフの貧民教育事業は、貧困の厳しい現実と直面し、頓挫していた。その失敗を通して彼は、信仰が自らのうちで冷めていくと同時に、真の敬虔の与える力の喪失を感じたという。そして、自らの信仰に対する態度を次のように示している。

「私は不信心です。(中略)私の生活におけるあらゆる印象が、信仰の祝福を私の最も内面的な心情からすべて追い出してしまったのです」<sup>(20)</sup>。

しかし一方で、こうした窮迫した状況ゆえに湧き立たせられた、情熱的な関心についても述べている。それは、自らがはまり込んだ混乱—「この世の泥土 (das Kot dieser Welt)」—にどのような秩序や法則があるのかを解明し、いかにしてそのなかに沈みこまずに突破していけるかを探究するというものである。このような態度と関心から、ペスタロッチーはまず、キリスト教の本質について極めて合理主義的に言及する。

「私は自らの運命に導かれて、キリスト教とは、精神を肉体から浄化し、高めさせるための教えを最も純粋に、かつ高次に修正したものに他ならないと考えます。(中略)もう少しわかりやすく言えば、純粋な愛の感情の内的な発展において、理性をして感性を支配させようとするのが、この教えなのです」<sup>(21)</sup>。

キリスト教の本質は「地の塩 (das Salz der Erde)」<sup>(22)</sup>であり、ペスタロッチーはその求めるところに共感する。しかしながら、「この世の泥土」のなかで困窮しているような人々が、高尚な教説でもって、真に内面の気高さへと到達することができるのか。この問いに彼は「否」と答え、続けて次のように告白する。

「確かにキリスト教は、地の塩であると信じます。しかし私が、この塩をどれほど尊重しようとも、私は金も石も砂も真珠もそれぞれにこの塩とは別の価値をもっており、これらすべてのものの秩序やその有用性は、やはり別に認められなければならないと信じています。つまり私の信じていることは、この世のいかなる泥土も、キリスト教とは別の秩序と法則を持っているということです」<sup>(23)</sup>。

ここにおいて、「キリスト教とは別の」、さらに言えば「この世のいかなる泥土も」が持っているところの秩序と法則を、人間の内的な発展を指導する手段として用いることの意義が説かれている。それはすなわち、ペスタロッチーがかつて『隠者の夕暮』にて、人間本性の内奥に存するとみとめた「自然の秩序 (Ordnung der Natur)」に働きかけることを意図している。

このような主張は、ペスタロッチーの依拠するところの人間指導の原理が、キリスト教的であり、世俗的でもあるという不可解さを示すものともなっている。その矛盾を、ペスタロッチーはどのようにして克服したのだろうか。ソエタールによれば、その謎を解く認識論上の鍵は、『探究 (Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797)』にあるという。

### Ⅲ. 『探究』における「道徳的なもの」についての理解

1797年のこの大著では、ペスタロッチーの探究の基本原則を述べたその導入部においてすでに、対照的な二つのカテゴリーが見出される。ソエタールはこれを、「社会の客観的-構成的なカテゴリー (die objektiv-konstitutiven Kategorien der Gesellschaft)」と「統合の主観的-内面的なカテゴリー (die subjektiv-innerlichen Kategorien der Zusammenseins)」として特徴づけ、前者には知識や名誉、国家の法などを、後者には好意や愛、宗教などを当てて分析している<sup>(24)</sup>。そしてこれらの考察に関わって、啓蒙主義と敬虔主義との対比もまた、「冷静な知力 (klarer Verstand)」と「美しい心 (schöne Seele)」として象徴的にあらわされている。

#### 1. 「道徳的状態」における人間本性の超出

先にも述べたように、『探究』では、こうした一連の対比-啓蒙主義と敬虔主義、知力 (客観的なもの) と心情 (主観的なもの)、世俗的なものとキリスト教的なもの-をいかにして「止揚する (aufheben)」のかという

問いが究明されているのだが、マイヤー (Urs.P.Meier) によって究明されているように<sup>(25)</sup>、その契機は人間存在が「道徳的状態 (sittlicher Zustand)」へと至るプロセスにてあらわれる。そのプロセスの内実は、人間が「自然状態 (Naturzustand)」の墮落を経験することから始まり、次のように説明されうる。

まず、人間はその本質において「好意 (Wohllieben)」に規定されることが示される。ペスタロッチーによれば、それは、人間本性の「無邪気 (Umschuld)」を源泉とし、欲求の充足や感覚の楽しみが容易に得られるところで、おのずから生起される心の状態である。しかし人間は、この世に生まれるなりただちに、自己の欲求 (「我欲 (Selbstsucht)») を増大させ、満たされない状態を経験するようになる。ゆえに「好意」は働かなくなり、「我欲」に圧倒されて自滅してしまう。これが「自然状態」にある人間の墮落である。

この状態は、「社会状態 (gesellschaftlicher Zustand)」にも引き継がれる。より大きな関係のなかで、人間はなおも「我欲」に支配され、墮落している。しかしその一方で、このような状態に留まることを否定し、脱却を図ろうとする「意志 (Wille)」もまた、生じ始める。それは、自らの内奥に眠る、自己自身をして「我欲」と戦わせる力を燃え上がらせていく。そして「我欲」との戦いに打ち勝った人間は、その本質において「死の飛躍 (salto mortale)」<sup>(26)</sup> ともいえる超出、あるいは再生を遂げ、「道徳的状態」に至るというのである。

さて、このプロセスにおいて、「好意」は「我欲」によって力を失っている。しかし決して捨て去られたわけではない。その実質は保存されているのであり、「意志」の作用を契機として高い次元に引き上げられ、再生されて「道徳的状態」そのものなかに組み込まれていくのである。その意味においてマイヤーは、このようなプロセスを弁証法的連関と呼んだのだ。

#### 2. 「心情」の優位性

この「止揚」によって、認識論上は一連の対立が克服されたとみなせよう。しかしソエタールは、「好意」の根源的な力に作用するところの、「意志」に基づく「判断 (Urteil)」が、ペスタロッチーにおいては基本的に、「人間の心情 (Gefühlsnatur des Menschen)」に規定されているという<sup>(27)</sup>。このことを指し示しているのが、「道徳的状態」の前提に関連して繰り返される、「好意の優越 (das Übergewicht des Wohlliebens)」の言及である。

「好意と我欲との均衡は社会的状態においてはまったく不可能である。(中略) 真の均衡は我欲に対する好意の優越に基づいてこそ可能なのである」。そして「人類もただ、この好意の優越によって道徳的になる」。

「私の我欲と私の好意の調和は、それ自体として道徳—私の我欲に対する、醇化され、高められた好意の優越—が、私の本性にとって可能となるために必要不可欠の心の状態にまで、私を感性的、動物的に連れて行くことに他ならない」<sup>(28)</sup>。

ペスタロッチーによれば、「好意」と「我欲」の均衡や調和が語られているが、それはあくまでも「好意の優越」、すなわち「我欲」に対する「好意」の勝利を意味している。そして、それを可能とする「心の状態 (Gemütsstimmung)」に至ることが、いわば「道徳的状态」へのプロセスなのであるが、ペスタロッチーはこの状態の核となるものを、宗教的な色調を帯びた「愛 (Liebe)」に求めている。

ペスタロッチーにおいて、「道徳的状态」へのプロセスは、素朴な快の感情である「好意」を、人間はいかにして崇高な「愛」へと高めうるのかという問いへと敷衍される。しかしその道筋は、合理的に説明できるものではない。「死の飛躍」が端的に示しているように、「感性的、動物的に連れて行く」という非合理的なアプローチしかない。ペスタロッチーの意図する「道徳 (Sittlichkeit)」は全くの「心情」の問題なのである。このことはまた、「道徳」を動機づけるものとして「義務 (Pflicht)」という「理性的 (vernünftig)」な契機が退けられていることから明らかである<sup>(29)</sup>。

### 3. 「宗教」と「道徳」

ところで、人間を道徳的な高みへと至らせる契機となった「意志」の力、さらに言えば、自らの墮落を裁き、「もはやここに留まるべきではない」という決定を導いた「判断」は、どのようにして可能となるのだろうか。このことについて、ペスタロッチーは次のように述べている。

「宗教の外的なものは、礼拝に関することだけである。しかし宗教の本質は、私自身の真理と本質との関する私自身の内的判断である以外の何ものでもないのだ」<sup>(30)</sup>。

この言及から、ニコロヴィウス宛書簡にしたためられた信仰告白が想起されよう。ペスタロッチーは『探究』においても、「精神をして肉体を支配させようとする最高の努力」であり、自然の力に対抗する「意志の力」であるとして、「宗教」の本質をとらえている。また別に、次のようにも記している。

「宗教はこの導きの力 (道徳的状态へと導く力—筆者注) のなかで、私の本性にとって可能な最高の力である。しかし私の我欲と私の好意との調和を助けるために、宗教が宗教としての最善を尽くしても、それだけで社会的な人間を道徳的にすることはできない」<sup>(31)</sup>。

ペスタロッチーは、「宗教 (Religion)」が「地の塩」であることを認めつつも、しかし「宗教が宗教としての最善を尽くす」だけでは人間を「道徳的状态」へと導くことはできないという。彼が見つめるのは、「この世の泥土」にまみれ、困窮のなかでもがいている人間である。たとえ経済的には裕福であっても、「我欲」に支配され、内的な墮落の極みにあるような人間である。彼らは「その精神を、宗教の内的な本質によって清められていない」ので、自らの想像力の生んだ像に固執し、動物的な欲求が陥れるのと同じ過ちに身を落としてしまう。つまり、この「宗教」の本質にある導きの力を機能させるには、まずもって人間の指導が必要なのである。

ここにおいて、ペスタロッチーの視線は教育へと再び差し向けられる。「道徳的状态」へと至るプロセスは、「宗教の本質」たる「導きの力」を必要とする。しかしその力が機能するには、それを自らのうちで働かせうる土壤がなければならないのである。こうして彼の関心は、「この世の泥土」にまみれた人間の内面を知り、そのうちに「好意」を目覚めさせるための「方法」へと転換していったのである。

## IV. 結びにかえて

### 1. 敬虔主義と啓蒙主義の交差点としてのペスタロッチー

「理性 (Ratio)」の熱狂から人間へとまなざしを転じると、おのずから人間の革新という教育の問題が生起する。その意味において、啓蒙主義は18世紀を「教育学の世紀」にしたといえる。ペスタロッチーのまなざしを教育へと差し向けたのも、こうした時代精神によるところも大きかったと思われる。

しかしながら、『探究』に示されたように、ペスタロッチーの人間指導の原理は、決して「理性」を追い求めるものではない。自らの不信仰を表明しながらも、その骨格は、宗派による形式的儀礼を改革し、純粹に神を敬い、信じる心に還ろうとした敬虔主義の要素が形成しているように思われる。

ソエタールが指摘するように、このことをただちに、啓蒙主義との対立や決別として捉えることは早計であろう<sup>(32)</sup>。むしろ「〇〇主義」で括ることのできない点

にこそペスタロッチーのユニークさがあると言えるかもしれない。しかし、ペスタロッチーが貧児や孤児の教育に邁進したことや、学園が中産階層に高い評価を得ていたにもかかわらず、再び貧児の教育へと立ち戻ろうとしたことなどを考えると、そこには、啓蒙の人間指導の原理では如何ともしがたい「子どもたち（人間）」の現実があり、敬虔主義の影響を受けた彼のまなざしは、やはり最下層民の苦悩に向けられていくことになったのであろう。ここに筆者は、ペスタロッチーの思想形成の特異性と後の教育実践へのつながりを見とめるのである。

## 2. シュタンツにおける教育実験における教育学的「行為」の構想

『探究』のメッセージは、「道徳的状態」にある人間だけがその存在の避けられない対立や矛盾を克服しようとするものであるが、それはいかにして実現されるのだろうか。「止揚」の契機はどのようにして訪れるのか、それを人為的にもたらすことは果たして可能なのか。

ペスタロッチーはこうした問いを、教育法（教育の方法論：Pädagogik）の課題として捉えるようになっていく。『探究』の執筆後、彼の問いを確かめうる機会が与えられたのである。それが、1799年のシュタンツの孤児院での教育実験である。その詳細な分析は次稿にゆずりたいが、本稿の課題との関連から重要であると思われる、いくつかの分析の視点を提示しておきたい。

(1) シュタンツの孤児院における教育実験は、初期著作から『探究』にかけて試みられた敬虔主義と啓蒙主義の相克を、人間指導の現実において確かめるものである。それがどのような思索や活動にあらわされているのか。

ソエタールはまず、教育実験のドキュメントにおいて「心情」への注目が優勢である点を取り上げ、敬虔主義的な思想基盤の発露と見ている。しかしながら、そこにはまた、「心情」を一面的には優遇しないとする、ペスタロッチーの態度があることも指摘している<sup>(27)</sup>。この着眼を踏まえながら、『シュタンツだより (Pestalozzi's Brief an einen Freund über seinen Aufenthalt in Stanz, 1799)』を分析する。

(2) 「この世の泥土」にまみれたような子どもたちには、「地の塩」である「キリスト教徒は別の」秩序や法則がある。このような認識に立つならば、ペスタロッチーは「道徳」への入り口をどこに、あるいは何に見出しているのか。

そこで注目したいのが、シュタンツの孤児院にて展開

された子どもたちへの直接の指導と、その方法である。ペスタロッチーはその中心となるものを「道徳的基礎陶冶 (sittliche Elementarbildung)」と呼んでいる。この「道徳的基礎陶冶」は三つの段階で成り立っている。ゆえに、先行研究の多くが『探究』における人間の三つの状態—「自然状態」「社会的状態」「道徳的状態」—を想起し、その発展をたどるように指導が行われていくとの解釈を提示している<sup>(33)</sup>。

しかしながら、第二の段階として説明されている「道徳的行為の訓練 (Übung der sittlicher Handlung)」では、「技能 (Fertigkeit)」や「身体 (Körper)」—また別の個所では「労働 (Arbeit)」とも関連して—が問題となっている。「頭」と「心」、「知力」と「心情」の対比において、教育学的構想では「技能」や「身体」といった「行為 (Handlung)」がその中心にあらわれている。この点に注目し、ペスタロッチーの方法を再考したい。

## 注

- (1) Vgl. Martin Hürlimann : *Die Aufklärung in Zürich. Die Entwicklung des Züricher Protestantismus im 18. Jahrhundert.* Leipzig 1924.
- (2) ボードマーの指導のもとに創設された「なめし革結社(ゲルヴェ・ヘルヴェチア協会 : Gerve Gesellschaft)」の通称であり、チューリヒの青年たちが展開していた二つの愛国者団体を一つの運動に統一したことによるものである。「覚醒者 (Der Erinner)」という週刊新聞を発行し、愛国的なナショナリズム運動を展開した。ペスタロッチーはそのメンバーとして、『アギス (Agis, 1765)』や『希望 (Wünsche, 1766)』などを発表し、青年らしい理想主義の夢を展開した。
- (3) ヨハン・ヤコブ・ボードマー (1698 - 1783) : コレギウム・カロリヌムの教授であり、若いペスタロッチーの思想形成に多大な影響を及ぼした教師の一人である。文芸評論家として、プライティンガーとともにドイツ啓蒙主義時代のスイス派を代表した。代表作には、『詩における驚嘆すべきものについての論考 (Abhandlung von dem Wunderbaren in der Poesie, 1740)』がある。
- (4) ヨハン・ヤコブ・プライティンガー (1701 - 1776) : カルル大学の外国語担当教授である。愛と情熱をもって行動し、学生からの信頼も厚かった。その姿勢から、ペスタロッチーも大いに学んだとされる。
- (5) Vgl. Hürlimann, a.a.O.
- (6) 端的に言えば、19世紀後半のドイツの、プロテスタン

- トの教えを信奉する地方に置いて起こった教会改革運動を総称するものであり、その本流と見なされているのが、フランケを創始者とするハレ派敬虔主義である。敬虔主義のプロテストは、国教会を支配してきた統一的な「正統派 (Orthodoxie)」に向けられたものであり、その硬直した教義的礼拝の形式主義に対して、ルターの精神に立ち返り、空洞化した教会を改革して純粋な信仰を復活させようと、信仰する魂の主観を重んじる立場をとった。
- (7) ソエタールは、ペスタロッチーの義理の父親であるシュルテス (Hans Jakob Schultess) がフランクフルトやリヨンの敬虔主義者グループと密な関係をもっていたことや、その家族がすでに二代にわたって敬虔主義的伝統を保持していたことのほか、ペスタロッチーの祖父で父親代わりでもあったアンドレアス (Andreas Pestalozzi) が、1722年12月22日、ハレのフランケに宛てて手紙を書いていることなどを証拠として挙げている。Vgl. Michael Soëtard : *Pestalozzis Pädagogik am Schnittpunkt zwischen Aufklärung und Pietismus*. In : *Das Kind in Pietismus und Aufklärung*. Herausgegeben von Josef N. Neumann und Ido Sträter, Tübingen 2000, S.312.
- (8) 森川直『ペスタロッチー教育思想の研究』福村出版、1993年、29頁。
- (9) Vgl. Maria Crespo : *Verwalten und Erziehen. Die Entwicklung des Züricher Waisenhauses 1637-1837*. Zürich 2001, S.48.
- (10) Soëtard, aa.O., S.310.
- (11) アウグスト・ヘルマン・フランケ (1663 - 1727) : 1692年に、ハレ大学の教授とハレに隣接するグラウハの聖ゲオルク教会の牧師を兼任するためにハレに赴任した。そこで貧しい子どもたちの宗教的無知に直面したことから、それに対抗するためのさまざまな試みを行った。1695年、まとまった献金を得られたことから、孤児や貧児の教育と福祉の施設 (貧民学校) を創設し、やがてそれを24時間の完全教育を可能とする孤児院へと改めた。孤児院はハレ派敬虔主義の活動の中心点となり、そこでの教育や福祉の実践には、フランケの神学思想が忠実に反映されていた。
- (12) Johann Heinrich Pestalozzi : *Sämtliche Werke*, herausgegeben von Arthur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher, Kritische Ausgabe, Berlin und Leipzig, 1927ff, Bd.3,S.353ff.
- (13) ditto, S.354.
- (14) ditto, S.356.
- (15) ditto, S.357.
- (16) 邦訳 (長田新編集校閲『ペスタロッチー全集』第3巻) では、“Pest” について「伝染病」との訳語をあて、「理解力病」, 「心情病」としている。
- (17) Soëtard, aa.O., S.312.
- (18) Pestalozzi, *Sämtliche Werke*, Bd.1, S.99f.
- (19) Vgl. Johann Heinrich Pestalozzi : *Sämtliche Briefe*, herausgegeben vom Pestalozzianum und von der Zentralbibliothek in Zürich, Zürich 1946ff, Bd.3, S.300. ゲオルク・ハインリヒ・ルードビッヒ・ニコロヴィウス (Gerg Heinrich Ludwig Nicolovius, 1767 - 1839) : プロイセン教育改革期の宗務・文部行政官を務めた。文部官僚として民衆教育改善に尽力し、1808年からペスタロッチーのメトーデの導入を提唱した。カント主義の哲学に通じ、ヤコービとも交流があった。しかし両者は、カント哲学にもとづきながらも、カントの合理主義哲学とは立場を異にする、感情哲学に心酔していたといわれる。
- (20) 神を信じる者は、腐敗を防ぐ「塩」のように、社会や人心を醇化する模範であれ、という意味のキリスト教の教えである。模範や見本の意として用いられることもある。
- (21) Pestalozzi, *Sämtliche Briefe*, Bd.3, S.300.
- (22) ditto, S.300.
- (23) Vgl. Soëtard, aa.O., S.316.
- (24) Pestalozzi, *Sämtliche Briefe*, Bd.3, S.300.
- (25) Vgl. Urs.P. Meier : *Pestalozzis Pädagogik der sehenden Liebe. Zur Dialektik von Engagement und Reflexion im Bildungsgesehen*, Bern und Stuttgart 1978.
- (26) ヤコービ (Friedrich Heinrich Jakobi) によって提唱された。ヤコービはドイツの哲学者であり、理性に対する感情の優位性を説き、合理主義に対置されるところの感情哲学を主張した。「死の飛躍」は、悟性による概念的認識に対して、感情と信仰による直接知の優位を唱えた。そして神、自由、靈魂などの存在は、概念的認識から信仰への超越によって把握されると説いた。ニコロヴィウスを通じてヤコービを知ったペスタロッチーが、自らの宗教の超越性を示すためにこの言葉を用いたとされる。
- (27) Vgl. Soëtard, aa.O., S.317.
- (28) Pestalozzi, *Sämtliche Werke*, Bd.12, S.118.
- (29) ペスタロッチーが「道徳」を語る時、意識的にしろ無意識的にしろ、“Moral” や “moralisch” を用いていないという点にも、「道徳」における「心情」の優位の堅持が感じられる。
- (30) Pestalozzi, *Sämtliche Werke*, S.39.

- (31) ditto, S.118.
- (32) Vgl. Soëtard, a.a.O., S.318f.
- (33) Vgl. Wolfgang Klafki : *Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation von Wolfgang Klafki, 6.Auflage.* Weinheim und Basel, 1975. / Meier, a.a.O. / 森川前掲著ほか.

#### 参考文献

- ・ Friedrich Delekat : *Johann Heinrich Pestalozzi.* Wiesbaden 1968.
- ・ Heidi Kallert : *Waisenhaus und Arbeitserziehung im 17. und 18. Jahrhundert.* Frankfurt a.M., 1964.
- ・ Johann Heinrich Pestalozzi : *Sämtliche Briefe*, herausgegeben vom Pestalozzianum und von der Zentralbibliothek in Zürich, Zürich 1946ff
- ・ Johann Heinrich Pestalozzi : *Sämtliche Werke*, herausgegeben von Arthur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher, Kritische Ausgabe, Berlin und Leipzig, 1927ff.
- ・ Maria Crespo : *Verwalten und Erziehen. Die Entwicklung des Züricher Waisenhauses 1637-1837.* Zürich, 2001.
- ・ Michael Soëtard : *Pestalozzis Pädagogik am Schnittpunkt zwischen Aufklärung und Pietismus.* In : *Das Kind in Pietismus und Aufklärung.* Herausgegeben von Josef N. Neumann und Ido Sträter, Tübingen 2000, S.310ff.
- ・ Paul Wernle : *Der schweizerische Protestantismus im 18. Jahrhundert.* Tübingen 1923.
- ・ Paul Wernle : *Pestalozzi und die Religion.* Tübingen 1927.
- ・ Urs.P. Meier : *Pestalozzis Pädagogik der sehenden Liebe. Zur Dialektik von Engagement und Reflexion im Bildungsgesehen,* Bern und Stuttgart 1978.
- ・ Wolfgang Klafki : *Pestalozzi über seine Anstalt in Stans. Mit einer Interpretation von Wolfgang Klafki, 6.Auflage.* Weinheim und Basel, 1975.
- ・ K. ジルバー, 前原寿訳『ペスタロッチー—人間と事業—』岩波書店, 1981年.
- ・ 伊藤利男『孤児たちの父フランケー—愛の福祉と教育の原点』鳥影社, 2000年.
- ・ 日本ペスタロッチー・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロッチー・フレーベル事典』玉川大学出版部, 2006年.
- ・ 村井実『ペスタロッチーとその時代』玉川大学出版部, 1986年.
- ・ 森川直『ペスタロッチー教育思想の研究』福村出版, 1993年.

付記) 本研究は, 平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金 [若手研究 (B)・課題番号 20730517] の交付を受けたものの一部である.